令和7年度　高志高等学校　学校評価書

2026/3/17

項目	具体的取組		改善策・向上策
自ら学ぶ生徒を育てる	生徒自らが問いや課題を設定しながら学びを進める過程を通し、主体的・対話的で深い学びを実現する。	・90％以上の生徒が課題を自ら見つけ、主体的に学習できていると認識しており、子どもの学習に取り組む姿勢に対する保護者の満足度も高評価を維持している。	・生徒が主体的に学習に取り組めるよう、学習の見通しを持ったり、学習したことを振り返ったりして、自身の学びや変容を自覚できる授業・活動を取り入れていく。 ・家庭学習時間調査や面談等を充実させ、生徒の学習習慣の一層の定着を図るとともに、自ら課題・目標を設定し、主体的に学ぶ意欲を喚起する。
	探究創造科にふさわしい授業づくりや学習指導計画の作成に取り組む。	・90％以上の生徒・教職員が、深く考えたり対話したりする活動・授業を実施していると意識している。特に生徒の意識が高く、自己の考えを広げ深める対話的な学びができている。	・対話する必然性のある課題を設定するなど、授業改善の取組を継続していくとともに、学習指導要領や新傾向の大学入試等を念頭に置き、校内研修会を通して、指導法の共有や授業研究を継続する。
		・学習支援、探究活動、学校行事、中高一貫教育等の学校の取組について、90％以上の保護者が満足しており、その割合は昨年度より上昇した。 ・探究創造科にふさわしい授業づくりや学習指導計画の作成に継続して取り組んでいる教職員の割合は高水準を維持しているが、新しい知見を加えながら取り組んでいる教職員の割合が減少した。	・今後も、学習支援、探究活動、学校行事、中高一貫教育についての検討を、学び手である生徒の視点も取り入れながら中高の教員で更に進めていく。 ・今後も、教科会や校内研修会で、新しい事例やSSHの取り組みの経験を取り入れながら、探究創造科にふさわしい授業の実践や学習指導計画を作成し、教職員間で取組の共有を行っていく。
	SSH・SGHネットワークの取組（課題研究・各種研修・講演会・コンテスト等参加等）により、生徒の探究力や課題解決能力を高める。	・取組により生徒の探究力や課題解決能力が高まったと評価（A＋B）している生徒、および教職員は90％以上であり、目標指数を10ポイント程度上回っている。このことから、具体的な取組が着実に成果を挙げていると判断できる。 ・探究系の研修や各種コンテスト、フォーラム等への参加に意義を感じている（A＋B）保護者が90％以上に達している。生徒の参加を促す取組が奏功したのみならず、参加に至る過程での生徒の能力伸長を保護者が実感している表れと推察される。	・教職員に対する探究学習に関する研修会、チェックリストや評価ルーブリックを活用した課題研究指導の徹底、各教科における探究的学習活動等の更なる拡充を図る。 ・探究活動の意義を機会あるごとに生徒に伝え、活動に取り組む意欲・態度を更に高める。探究に関する各種コンテストやイベント、学会等へ積極的に参加するよう、引き続き生徒に呼びかける。必要に応じて大学教員等の専門家に生徒自ら助言を依頼するなど、生徒の主体的な取組を促す。 ・課題研究や各種研修、コンテスト等の成果について保護者により多く理解してもらえるよう、ニュースレターやウェブサイト等による広報を拡充する。
自ら考え責任を持って行動する生徒を育てる	ホームルーム活動・生徒会活動・学校行事等において、生徒が主体的に活動できる場を提供する。 生徒活動全般で起きる問題事案（いじめ等を含む）に対して早期発見に努めるよう教職員間で共有・連携をはかり、対処・支援にあたる。	・「主体的に行動する力を養い、リーダーとしての人材を育成することが十分にできた」と回答した教職員の割合が、昨年度より増加した。 ・学校生活全般において、思いやりや助け合いの心を持ち活動できる生徒が多く、いろんな場面で協力体制が図られている。	・部活動や学校行事等の学校教育活動においては、生徒が主体的に取り組めるよう、生徒との関わり方や支援のあり方について教職員間で意思疎通を図り対応にあたる。 ・ホームルーム活動・学校祭・生徒会活動・部活動等では、生徒が主体となった話し合い等の場を積極的に設定する（例：ホームルーム、生徒代議員会、生徒会執行部）。また、それらの活動の中で生徒が提案した事柄に対しては、生徒と教職員が意見交換等を十分に行った上で、生徒の提案が実現できるように取り組み、生徒の主体的に活動する姿勢、リーダーとしての資質育成にあたる。 ・生徒活動全般で起こる諸問題に対して、生徒同士で解決・対処法が見い出せるように支援・アドバイス等を送り改善にあたる。 ・いじめ等を含む気になる問題行動等の未然防止のために、生徒の変化を見逃さない共通認識のもと指導にあたる。またSCや関係機関とも連携を図り早期対応にあたる。
	心身の健康に配慮できる生徒を育てる。	・生徒の健康状態を把握し、「積極的に」対応しようと取り組んだ教職員の割合が増加した。 ・90％以上の生徒が、健康な生活に必要な行動をとることが「積極的に」または「おおむね」できたと回答し、目標を達成した。 ・生徒の病気やけがに対する本校の対応に、「十分」満足していると評価した保護者の割合が増加した。	・適時、学年会や担任と情報交換を行い、配慮を要する生徒についての共通理解を図る。 ・健康に関するポスターを掲示したり、保健だよりを定期的に発行したりして、心身の健康への意識を高める啓発活動を行う。 ・保健委員による衛生管理（石鹸・消毒液等の補充）や啓発活動（換気・マスク着用等の呼びかけ）を通して、健康を保持増進するための行動を更に促す。

生徒の夢・希望の実現を支援する	生徒自身が興味・関心を把握し、掘り下げることで、進路目標を明らかにし、進路目標実現に向けて努力を続けるための支援を行う。	・生徒一人ひとりに適切な進路目標を持たせるために生徒理解に努めることのできた教職員は昨年より減少したものの 94.1% と高い割合を維持している。また、生徒一人ひとりに、より高い進路目標を持たせることができたと回答した教職員の割合も 85.1% と目標指数を上回った。 ・「一人ひとりがより高い進路目標を持ち、その実現に向けて学習に取り組む」と回答した生徒は増加傾向ながら、79.7% と目標指数をやや下回った。	・大学の教員を招聘し、研究者から直接大学の紹介や大学での研究について話を聞く機会を持つことで、生徒自身の進路に関する意識を高める。 ・今後も、大学が実施する公開講座やオープンキャンパスへの参加を、更に積極的に参加するよう生徒に働きかける。 ・GoogleClassroomを活用した情報提供や、生徒がどこを見れば必要な情報を得られるか、わかりやすい情報提供に努める。 ・他校(藤島・武生)との合同企画を計画するなど、生徒の進路意識の高揚に努める。
		・進路選択に関する行事等が参考になったと回答した生徒は3学年とも 95% 前後であり、目標指数を上回った。	・今後も、各学年が行っている進路学習を、高校3年間のキャリア教育全体計画の中に位置づけ、3年間を見通した体系的な進路支援に努める。
	各教科担当者が、大学入試問題、大学入試改革等の研究と分析を通して、生徒一人ひとりの進路目標に合わせ、目標実現に必要な学力向上のための支援を行う。	・5教科全ての教員が共通テストの問題分析を行っている。 ・5教科のほぼ全ての教員が模試の見直しを行っている。 ・難関大および地元大の個別試験分析を行った教員の割合が 82.0% と目標指数を下回った。「何もしなかった、および一部の問題しか分析をしなかった」と回答した教員の割合が 18.0% と昨年度同様であった。 ・模試実施後の見直しを行っている生徒の割合は全学年で、目標指数を上回った。	・今後も共通テストの問題分析を全ての教員が引き続き行っていく。 ・個別試験の分析を更に進め、普段の授業、考査、課外での指導に反映させる。 ・予備校等が開催する入試問題検討会等へより多くの教員が参加できるように努める。 ・生徒への指導の充実を図るために、個別試験の問題分析会を教科会で開催し、情報を共有する場を設けることで、問題分析の重要性を認識できるよう教員に働きかける。 ・今後も、模擬試験の見直しを生徒に更に強く働きかけ、模擬試験受験の効果を最大化できるよう努める。
豊かな情操の涵養	朝読書週間、図書館講座、ビブリオバトル等の行事や掲示物、広報紙等の発行を通して読書意欲を喚起し、図書館利用および読書量の増加を図る。	年間貸出冊数、年間利用数は目標をクリアした。図書館だよりが生徒の目にふれる機会が十分ではない点が課題である。	・引き続き読書週間等の機会を利用して読書の大切さを訴えていく。 ・生徒が図書館だよりに関心を持つようにするため、図書委員がショートホームの時間に図書館だよりの紹介を行う。
	様々な人々との交流を促進することで、多様性への理解と自己の成長を促す。	・85%以上の生徒が、校内外の様々な人たちとの交流を通して、多角的な視点を獲得し、自己の成長につなげることができたと感じている。	・今後も他校の生徒、社会人、留学生や海外経験者との探究活動、交流イベント、講演会を計画し、活動後の自分の価値観の変化に気づき、自己の成長につなげられるよう、振り返りの時間を取り入れて実施していく。
安心して学べる環境	相談環境を充実し、カウンセリング等をいつでも受けることができるようにする。	・ほぼ全ての教職員が、悩みを持つ生徒への対応に「積極的に」または「おおむね」取り組んだと回答し、目標を達成した。 ・94.4%の生徒が、悩みを相談できる人が校内におり「満足」または「おおむね満足」と回答し、目標を達成した。 ・94.2%の保護者が、子どもの悩みや不安などに寄り添う対応が「十分」または「おおむね」できていると評価し、目標を達成した。	・職員会議等の機会を捉えて、教職員全体に対し共通理解を図り、気がかりな生徒への声かけや対応を継続して行う。 ・学校全体で支援していくことを前提に、スクールカウンセラーや外部機関との連携を強化するなど、相談活動の充実に努める。 ・担任等による定期的な面談や「いじめアンケート」等を通して、今後も生徒の悩みや不安などの早期発見・早期対応に努める。
	清掃活動等を通して、校内美化のために自ら考え主体的に行動できるようにする。	・清掃時間中の環境美化指導を「毎日欠かさず」行ったという教職員の割合が増加した。 ・93.4%の生徒は、校内の環境美化活動に「積極的に」または「おおむね」取り組んでおり、目標を達成した。 ・95.2%の保護者が、校舎内外の環境美化が「よく」または「ほぼ」行き届いていると評価し、目標を達成した。	・生徒の校内美化への意識を高めるために、教職員が率先して校内の環境美化活動に取り組む。 ・ゴミの分別やゴミの持ち帰り習慣が徹底するように啓発活動を行う。 ・美化委員による掲示物の作成や放送連絡(呼びかけ)等を通して、更なる環境美化のための行動を促す。
	保護者と学校との連携を充実させるとともに、生徒が防火防災を意識し、安心・安全な学校生活を送れる環境づくりをすすめる。	・ほとんどの生徒が防災意識の大切さを理解していると答えており、防災に対する取組は十分できていると考えられる。 ・ほとんどの保護者が本校のPTA活動などの取組に満足していると答えており、保護者と学校との連携が十分できていると考えられる。	・昨年度、今年度と天候等の影響で、グラウンドに避難する防災訓練を実施することができなかったため、次年度の実施時期を検討し、更に生徒の防災意識を高められるようにする。 ・保護者と学校との連携がとれるように、今後も充実した活動を継続していく。
教育DXの促進	授業や校務において、ICTを積極的に活用する。	・本年度は高校1年生の端末と校内ネットワーク、3年生教室で電子黒板が更新され、教育DXを行う環境の改善が進んだ。 ・授業におけるICTの活用状況は教職員、生徒ともに非常に高い。 ・近年AIが飛躍的に進歩した。教職員の校務での利用を更に進めたい。	・端末やアプリの使い方について、個別支援を行う。 ・教職員の校務でのAIの活用方法について情報提供を行う。
働き方改革	a　定時退庁日の完全履行 b　長期休業日の「学校閉庁日」の増加 c　「早出・遅出勤務」の導入 d　職員会議の時間短縮 e　年休の取得推進 f　業務改善リーダーの提案に基づき、積極的な業務改善のアクションにつなげる。	・教職員の働き方改革の取組の必要性について、98%とほぼ全ての保護者から理解を得ることができた。 ・超過勤務削減のための業務の見直しを積極的に行っている教職員が昨年に比べて大きく増加した。 ・ワークライフバランス実現のための、教職員の休暇取得目標について、目標指数である80%を大きく上回ることができた。	・引き続き保護者の理解を得ながら教職員の働き方改革や業務精選の取組を進めることで、教職員の心身の健康維持とともに、授業研究や生徒と向き合う時間を確保し、より良い学校づくりに努めていく。
総合	地域社会及び国際社会に貢献する知徳体の調和のとれた人材を育成する。	・自身の活動が「学校や社会を良くすることにつながる」と回答した生徒が昨年度に続いて90%を超えており、各種活動に意欲的に取り組む生徒の姿がうかがえる。 ・学校に通うことが「楽しい・充実している」と答えた生徒が昨年度よりも増加した。	・今後も、学習、探究活動、部活動、生徒会活動等、生徒の主体的かつ意欲的なチャレンジを教職員一丸となって支援していく。 ・引き続き、学校生活の様々な場面で、リーダーとして活躍したり、他者と協働してより良いものをつくりあげたりする機会を設けることで、生徒の自己有用感を高めていく。